

多くの他者との関わりを通して自らの課題を解決する資質・能力を育む

探究的な学習の指導法

— 第3学年の進路学習を題材として —

宮城県南三陸高等学校 早坂 祥

1 研究主題について

「高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説 総合的な探究の時間編」（以下「学習指導要領・総探編」）には総合的な探究の時間の目標として「探究に主体的・協働的に取り組むとともに、互いのよさを生かしながら、新たな価値を創造し、よりよい社会を実現しようとする態度を養う」とあり、生徒たちが協力してよりよい社会を実現する態度を養うことを目指していることが分かる。また本校では、みやぎの志教育の3つの視点の1つ「人と『かかわる』」を基に、総合的な探究の時間の目標を「自己の意見や考えを的確にまとめ、他者に伝えるコミュニケーション能力を培い、現代社会に適応できる自己表現能力を養う」とし、他者との関わりの中で社会に適応する力を育成する方針が示されている。

本研究の対象となる3年3組で行った事前調査（図1）によると「あなたは普段の授業の中で、他者と関わることの価値を感じていますか」に「当てはまる」または「どちらかといえば当てはまる」と回答した生徒（以下、肯定的回答をした生徒）が約60%であった。一方で、このことから約40%の生徒が他者との関わりにあまり価値を感じていないことが想定される。同じく「あなたは他者とコミュニケーションを取ることが得意だと思いますか」に肯定的回答をした生徒が約40%であることから、約60%の生徒が他者との関わりを不得意だと感じている。加えて「あなたは普段の授業の中で、疑問や問題点を見つけるのは得意な方ですか」に肯定的回答をした生徒は約50%である。これは問題を課題として意識する経験の不足が原因だと考えられる。

本校の総合的な探究の時間の目標と生徒の実態を踏まえ、多様な他者との関わりを通して自らの課題を解決する授業実践が必要であると考え、研究主題を設定した。研究の手立ては以下の2点である。

視点①：他者の意見が自らの考えを広げてくれることを実感できる。

視点②：本時の学びを新たな探究につなげられる。

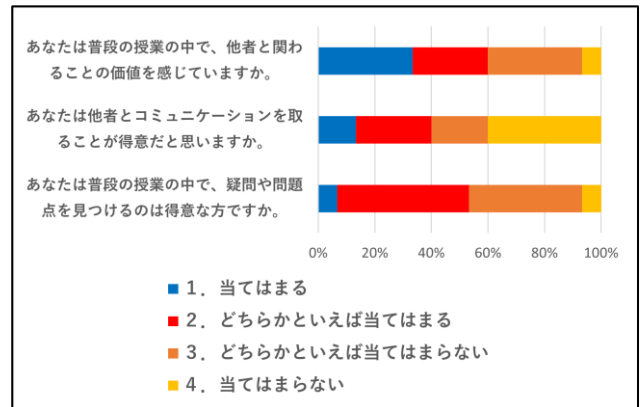


図1 総合的な探究の時間に関する事前調査

2 研究の目的と方法

(1) 研究の目的

本研究は、実社会と関連した課題に対する自らの考えを発表する活動を通して、他者と関わることの有用性を実感し、自らの進路を広く捉えるための新たな気づきや考えを持つことができるようにすることを目的とする。

(2) 研究の手立て

以下2つの手立てについて授業での実際を述べる。

視点①：他者の意見が自らの考えを広げてくれることを実感できる。

授業の課題に対し、自分で、もしくはグループで考えた内容を発表し、他者から感想や質問をもらうことが自らの意見を広げてくれることを実感できる授業にする。多様な他者から意見を取り入れる機会を増やすため、発表は1つのグループだけで終わらせず、新たにグループを組み直して発表する。また、課題については3学年として自らの進路を多様な視点から考えることができるものに設定する。

視点②：本時の学びを新たな探究につなげられる。

他者からの意見を基にして自らの発表内容を修正する時間を設定したり、授業全体を通して得た学びを他者と共に振り返らせたりすることで、授業を通して得た学びを、自らの新たな探究活動につなげることができる工夫をする。

(3) 研究の方法

本研究は「学習指導要領・総探編」に示されている「探究の過程」の4つのプロセス「①課題の設定」「②情報の収集」「③整理・分析」「④まとめ・表現」を経験できるよう、2時間にわたってデザインしている。第1時に授業課題を提示し、グループごとに課題に対する調べ学習や発表準備を行い、まとめた内容を第2時に発表する。この授業を通して、他者との関わりが、生徒たちにどのような変容をもたらしたかについて、実践での発表内容やアンケートを通して検証していく。

3 授業実践Ⅰの取組

(1) 実践Ⅰの手立て

視点①：他者の意見が自らの考えを広げてくれることを実感できる。

5名グループで発表内容を作成していく時間を設け、発表についてはワールドカフェ形式で発表を聞く生徒を入れ替えて、一人でも多くの生徒から感想や質問を受ける機会を増やす。このことにより、他者からの意見の有用性を実感できる授業にする。

視点②：本時の学びを新たな探究につなげられる。

生徒同士で本時の感想を共有し合う時間を設定したり、記述式のオンラインアンケートフォームによる記述式の振り返りシートを活用したりすることで、本時の活動で得た学びを振り返り、次の新たな探究活動につなげることができる工夫をする。

(2) 実践の概要

1時間目では5名ずつの3グループに分かれ、グループごとに「製造系の企業にとって、高校3年生に身に付けてほしい資質・能力は『〇〇力』である」の〇〇に当てはまる表現を、企業の資料やホームページ等を調べながら考える。本校からの就職が多い業種であるということと、一定の方向性が示されていた方が対話を深めやすいという考えから、製造系の企業に限定した。グループごとにまとめた内容を2時間目で発表するため、1時間目に発表の準備も併せて行う。なお、発表は2分間で行うということのみを伝えている。結果的に、全グループがプレゼンソフト等でまとめたスライドをタブレット端末を用いて発表した。

2時間目は、ワールドカフェ形式で、1時間目にまとめた内容の発表を行う。この時間の課題は「製造系の企業にとって『〇〇力』はなぜ大切なのか、についてグループごとに考えを2分程度で発表してください」としている。各グループ内で、発表者・記録者・アドバイザーの役割を1人ずつ選び、役割

を交代しながら自らのグループの発表を行う。それ以外の生徒は他のグループの発表を聞きに行く。なお、発表を聞いた生徒は必ず感想を伝え、「質問の観点シート」（「問う方法・考える方法『探究型の学習』のために」²⁾を参考に作成）を参考にしながら1つ以上質問をするように指示する（視点①）。発表・質疑応答後の移動の流れは図2の通りである。

2回発表が終了したら元のグループで感想を共有しつつ、発表内容を修正する。修正後、再度タイムテーブルに従って移動し、発表を行う。全ての発表が終了したら、グループごとに感想を共有し、オンラインアンケートフォームを用いて本時の活動を振り返る（視点②）。

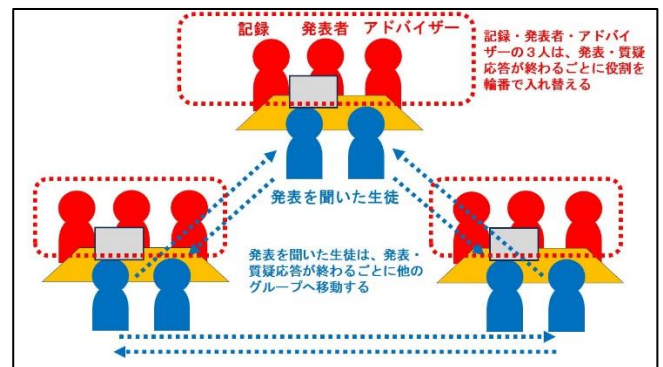


図2 発表・質疑応答後の移動の流れ

(3) 実践の結果

実践を通して、想定以上に生徒たちから多様な考えが引き出された。

本時の発表内容である「〇〇力」については、「忍耐力」「対応力」「機械を操る力」等、回答の幅が多様であった。グループごとに発表の準備をする場面では「製造業だと、作業を続けられる忍耐力は必要だろう」「でも、ただ指示に従うだけならこの先AIに置き換えられる可能性はないだろうか」等、企業の立場に立って必要な能力は何かをグループで考えていく姿が見られた。

内容を発表する場面では、グループごとに工夫を凝らして発表している中で、その発表内容を更に深める可能性のある質問をしている姿が印象的だった。「質問の観点シート」に沿うだけでなく「機械よりも優れていない人材はいらないのか」等、発表を聞いて自ら問いを生み出している生徒も見られた。

また、本時の授業後に記述式のアンケートを実施した。その中で「他者の発表を聞く、または他者から感想をもらったり質問を受けたりする中で、気付いたことを入力してください」の項目に対し「自分たちの発表を客観的に見てくれていたから気付かないところに気付くことができた」「自分は納得して聞いていたところも、同じ発表を聞いた人は疑問を持っていた、自分は納得した気になっていただけで、

違う感覚を持った人と同じ発表を聞くことで、考えを更に深められると気付いた」等、他者に対して発表することや他者の発表を聞くことに対して全員が肯定的に回答した。加えて「他者の意見というのは固まってしまった自分の考えを崩すために大切なことであると思った」「意見は十人十色だから自分の意見に執着することなく、広い視点で課題に向き合うことで、自分の概念とか持っている知識とかに新たなひらめきを与えられると知った」等、15名中14名が他者の影響を受けて自分の内面に変化が生じた旨を記述していた。このことから大多数の生徒が他者の意見に価値を感じたことが分かる。

一方で、多様な他者からの意見を基に発表内容を修正して次の発表内容に生かすという教師側の意図を明確に伝えきれず、修正後の発表内容に変化のないグループがあった。方法だけでなく、なぜ行のかという活動の趣旨を、授業を行う意図と併せて、授業の最初に明確に伝えることが必要であると感じた。

4 授業実践Ⅱの取組

(1) 実践Ⅰを受けての修正点

授業実践Ⅰを経て、他者と協働することに価値を感じるようになった生徒は多かったものの、15名という少人数での実践となったため、意見の広がりに限定的であった。そのため授業実践Ⅱでは、生徒たちが授業実践Ⅰ以上に多様な他者と双方向に関わることができるよう、発表の対象を3学年全体に拡大した。また、3学年の保護者宛てに授業参観の案内を出し、希望する保護者には授業を参観する中で、生徒たちの発表に対する感想や意見をいただくよう計画した。

(2) 実践Ⅱの手立て

視点①：他者の意見が自らの考えを広げてくれることを実感できる。

生徒が自らの将来について考えた内容を発表し、それを基に多様な他者から感想や質問を受けることで、自分にはない新たな視点を得る。その過程を通じて、自分の考えの深まりを実感できる授業にする。

視点②：本時の学びを新たな探究につなげられる。

発表内容を更に充実させるため、自らの発表に対する他者の意見を取り入れ、改善するための時間を設ける。また、授業の最後には、本時の活動を生徒同士で共有する時間を確保する。これらの取組により、生徒がその日の学びを振り返りながら、自身の探究活動へどのように結びつけていくかを考えるきっかけを与える工夫をする。

(3) 実践Ⅱの概要

本実践は、第1時に以下の課題について生徒一人一人が考えをまとめ、第2時の発表に向けた準備を行う。

【課題】「〇〇年後、社会人になったあなたに対して母校である南三陸高等学校から『本校の卒業生であるあなたに、社会人講話の講師として本校の生徒たちに対してあなたのエピソードを話してほしい』という依頼がありました。あなたは母校の生徒たちに対して、何を伝えますか。現在の希望進路に進むことができたとして、なりたい自分の姿、その時に想定される社会状況等について具体的にイメージし、まとめた内容を2分間で発表してください。」

なお、発表形式は問わず、何年後を想定するかは生徒たち一人一人が設定することとする。第1時の導入で本実践の目的と上記の課題について説明し、その後は発表に向けた準備を行う。その際、生徒同士で協力して進めても良いということを伝える。

2時間目は、第1時に準備した内容を生徒一人一人が発表する。最初に、あらかじめ教師側で用意したグループ分けの表に基づいて、3名一組のグループに分かれる。導入で本時の目的と課題の確認、そして本時の流れについて説明する。その後、グループごとに発表順を決めて発表を開始する（図4）。2分間発表した後、3分間振り返りの時間を設定し、発表を聞いた生徒が感想を伝えたり、質問を投げかけたりする。参観を希望する保護者の方々からも感想や質問をいただき、より多くの他者から意見をいただけるようにする。多くの他者からの意見が自らの視野を広げてくれることを実感させるために、この振り返りの時間が本実践で特に重要な時間となることを、授業の導入で生徒たちに伝えた（図3）。

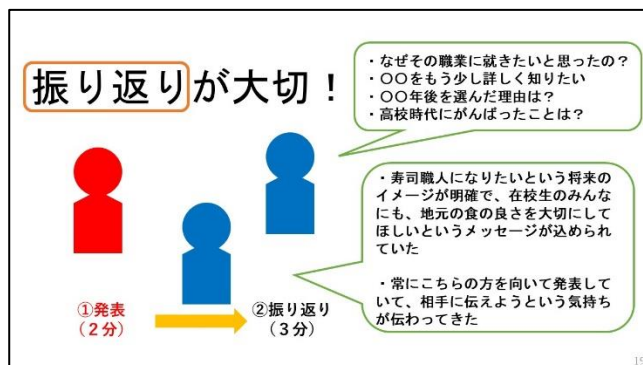


図3 振り返りの時間の重要性を伝えるスライド

グループ内全ての生徒の発表終了後、他者からの感想や質問を踏まえて生徒一人一人が発表内容を修正する時間を5分間取る。その後は新たな3名一組のグループに分かれ、最初のグループと同様の流れで発表（2分間）と振り返り（3分間）を行う。終了後、1ターン目のグループに戻って3分間で本時

の感想を共有し、最後にオンラインアンケートフォームを用いて2分間振り返りを行う。



図4 グループごとの発表の様子

(4) 実践の結果

本実践後の総合的な探究の時間で、3年3組一人一人の発表の様子をタブレット端末で記録した。その結果、13名全員が希望進路に合わせて将来の姿を計画していた。更に高校時代に自らが力を入れて取り組んできたことを踏まえ、在校生に対して「高校生のうちに〇〇に取り組んでおく方が良いと思います」等のメッセージを込めた発表となっていた。発表方法は多様であり、自由度を持たせたことで生徒たちも自分に合った方法で計画していた。

本時の中核となる振り返りの時間についても、評価規準シートに基づいた感想を伝えるだけでなく、「なぜ〇〇年後に設定したのか」「その職業を選んだきっかけを知りたい」「高校時代に苦労したことは何か」等、発表者の視野を広げる質問をしている生徒が多数見られた。また、授業参観を希望した保護者も感想入力シートにて「一人一人の個性が出ていて、目をキラキラさせながら発表していた」と述べていたことから、生徒たちだけでなく、保護者にとっても、将来を見据えた生徒たちの姿を見ることができた貴重な機会になったと考えられる。

また、本時の授業後にオンラインアンケートフォームで記述式のアンケートを実施した。その中で「他者から自分の発表の感想をもらう、または他者の発表を聞くことで、新たに気付いたことを入力してください」という項目に対し、「他者の話を聞いて、十人十色の経験をしてきたにも関わらず、要点が共通していて本当に学校で必要とされる学びが可視化されたのではないかなと感じました」のように、全員が他者の影響で新たな気付きを得られた旨を記述した。このことから、多様な他者と関わることでより13名全員が自分にはない視点を得ることができたと考えられる。

更に「自らの将来の姿をイメージして、本時で発表するまでのプロセスを通して、感じたことや気付いたこと等を入力してください」という項目に対し「当たり前だけど、どうなるかが分からない未来を文字にしてみることで「〇〇は△年までにやって…」「●●になるためには▲▲が必要だから…」と自分がこれからどう行動すべきかを考えるきっかけにな

った」のように、13名中11名が本時の活動を通してこれからの自分がやるべきことについて考えるきっかけを得ることができた旨の回答をしていた。

一方で、1ターン目の発表の修正箇所がなく、2ターン目の発表も同じものになってしまった生徒が多数見られた。2ターン目の発表に何らかの変化を付ける等の工夫が必要であると感じた。

5 研究の成果と課題

(1) 研究の成果

授業実践Ⅱの授業後のアンケートでは全ての生徒の記述に他者からの影響により新たな気付きを得た旨の記述が見られた。また、同アンケートで自らの進路を広く捉えるための新たな気付きや考えを持つことができたことと記述した生徒は13名中6名だった。これらの結果から、本実践を通じて全ての生徒が他者との関わりを通して新たな気付きを得ており、進路に対する視野の広がりも認められたことが分かる。特に授業実践Ⅰの課題を踏まえ、授業実践Ⅱでは他者の範囲を第3学年全体に拡大したが、授業実践Ⅰ以上に幅広い感想や質問をもらったことで、多くの生徒が新たな気付きを得られたと考えられる。

(2) 今後の課題

今後の課題として、他学年も巻き込んだ実践を行い、早期から多くの他者と関わる経験をさせることで、生徒一人一人が新たな気付きを得る機会を増やす必要がある。

また、自らの進路を広く捉えるための新たな気付きを全ての生徒が得られるよう、進路について考えるための具体的なテーマを設定し、多くの他者と関わるができるよう授業を計画する必要がある。これにより、本実践を基盤として、更に多くの他者と関わる機会を計画し、自らの視野を広げられる教育実践を目指す。

【引用・参考文献】

- 1) 文部科学省(2018)「高等学校学習指導要領(平成30年告示)総合的な探究の時間編」
- 2) 河野哲也(2021)「問う方法・考える方法『探究型の学習』のために」ちくまプリマー新書

【図の許諾について】

図1は、実践前に行った総合的な探究の時間の事前調査である。図2は授業実践Ⅰのワールドカフェの移動の流れを示した図である。図3は授業実践Ⅱの導入時に振り返りの時間の重要性を生徒たちに伝えるためのスライドである。図4は授業実践Ⅱの生徒たちがグループごとに発表している様子である。生徒の保護者及び所属校の校長より使用許諾を得た。